

ローマ帝国時代のアテネ

桑山由文（京都女子大学文学部）

はじめに ローマ元首政期までのアテネ

○ローマ元首政期（前1世紀末～後3世紀半ば）のアテネ——現在のアテネ市の遺構に大きな影響

○ギリシア世界の変容

前5世紀～ （古典期）	<ul style="list-style-type: none"> ・ギリシア本土の諸ポリスの隆盛 ・アテネの「黄金時代」。パルテノン神殿建設
前4世紀末～ （ヘレニズム期）	<ul style="list-style-type: none"> ・ギリシア文化圏の東地中海域・西アジアへの拡大とヘレニズム諸王国の乱立 ・ギリシア本土の相対的位置低下
前3世紀前半～	<ul style="list-style-type: none"> ・共和政ローマの東方進出とヘレニズム諸王国の征服（属州化） ・ギリシア本土＝属州アカイア（前2世紀半ば～）

○前1世紀までのアテネ——

- ・ヘレニズム諸王やローマ元老院議員による文化的伝統の崇敬。
- ・共和政末期ローマの権力闘争に巻き込まれ、甚大な被害。
ex.カエサル対ポンペイウス、オクタウィアヌス対アントニウス

1 アウグストゥスのアテネ ——ローマ支配の刻印——

○アゴラの変質

- ・アグリッピエイオン（アグリッパのオデイオン）建設
- ・初代皇帝アウグストゥスとその一族を祭る場所 ex.アレス神殿

○新アゴラ建設

- ・経済的中心の移転

* その後の約100年間、目立った大建築物造られず。属州アカイア内の一都市に転落

2 ハドリアヌスのアテネ ——新たなる輝き——

○ハドリアヌス帝（在位117-138年）

- ・トラヤヌス帝（在位98-117年）の遠縁の元老院議員。スペイン出身（ラテン文化圏）。
- ・ギリシア文化に傾倒。「ギリシアっ子」。元老院議員時代に1度、皇帝時代に3度ギリシア訪問
- ・アテネ名誉市民。アルコン職やディオニュシア祭のアゴノテテス職務める。エレウシスの秘儀入信

○アテネ大開発

- ・都市中心の拡充——「百本柱」（ハドリアヌスの図書館）建設 **（史料1）**
- ・オリュンピエイオン（ゼウス＝オリュンピオス神の神域）完成
- ・パンヘレニオン都市同盟創設とパンヘレニア祭開催。アテネはその中心的存在 **（史料2, 3）**

↓

* 「新しいアテネ」へと変貌

- ・ギリシア文化圏の中でトップクラスの偉容と地位を獲得。古典期の栄光の「復活」を企図

* その背景——ローマ帝国におけるギリシア文化圏の位置づけの変化

3 ローマ帝国の中のギリシア

- ローマ帝国によるギリシア文化圏支配の本格化
 - ・フラウィウス朝（69-96年）下での属州化の進展。小王国や地方政権の消滅
 - ギリシア文化圏の人々の中央政界への進出
 - ・トラヤヌス帝期には元老院で一大勢力（それまでの元老院議員身分＝イタリア・西部出身者）
 - ・出身地は小アジアやシリア——ギリシア文化圏の中での政治的・経済的先進地
 - ・ギリシア文化の発祥地である本土への強い「あこがれ」
 - イタリアや西部出身元老院議員たちとの混淆
- ↓
- *ローマ中央の「ギリシア化」傾向加速 →本土への「あこがれ」も共有
 - *こうした結びつきの典型——ハドリアヌスとフィロパップス

4 フィロパップスとハドリアヌス

- フィロパップス
 - ・70年頃生。コンマゲネ王国（ヘレニズム諸王国のひとつ）最後の王の孫
 - ・トラヤヌス帝によりローマ元老院議員身分に特別編入。109年のコンスル
- アテネへの強い「あこがれ」とその具現化
 - ・名誉市民。アルコン職やディオニュシア祭のアゴノテテス職務める
 - ・エレウシスの秘儀入信
 - ・大墓廟建設——市内の久々の大建築
- ハドリアヌスとの強い絆
 - ・ハドリアヌスの「師匠」的役割（史料4）
 - ・姉妹バルビッラはハドリアヌスやその妻サビナの側近

おわりに ハドリアヌス後のアテネ ——さらなる輝き——

- ハドリアヌス帝期におけるアテネの「復興」
 - ・帝国中央におけるギリシア文化圏出身者の興隆、彼らの本土への「あこがれ」の具現化
- アントニヌス＝ピウス帝期（138-161年）、マルクス＝アウレリウス帝期（161-180年）への継承
 - ・スタディオンと新オデオン建設。
 - ・担い手はヘロデス＝アッティコス——アテネの名門の生まれ。第2ソフィストの代表的人物
 - ・アテネへの「あこがれ」のさらなる実体化。「夢の都」

*アテネは、仮想的にギリシア文化圏の「首都」、ローマ帝国の「文化首都」に位置づけ
→近現代ギリシアへも大きな影響

史料

1 パウサニ阿斯『ギリシア案内記』第1巻18章9節

「ハドリアヌスはアテネ市民のために、このほかにもヘラとゼウス＝パンヘレニオスの神殿とパンテオンの造営をおこなったが、もっとも有名なのはフリュギア大理石造りの「百本柱 (ヘカトンキオネス)」である。」
(馬場恵二訳、岩波文庫版を使用。用語など一部、報告者が改変)

2 パンヘレニオン同盟創設に関する碑文 (IG II² 1088 + 1090 + IG III 3985. S. Follet と D. Peppas Delmoussou による校訂)

「・・・かの皇帝 (ハドリアヌス) は公私にわたって全ギリシア人に恩恵を与えたからである。すなわち、(ハドリアヌスは) 共有すべき贈り物として、彼ら (全ギリシア人) のうちから、かのシュネドリオンを最も輝かしいアテナイ人のポリスに招集したのであるが、(そのアテナイは) 善行者にして、秘儀の実りをその同じ場所であらゆる人々に与え、また、いとも崇高なパンヘレニオンを受け入れて、・・・」

3 デイオ・カッシウス『ローマ史』第69巻16章2節

「ハドリアヌスは、彼自身の聖域——パンヘレニオンと呼ばれている——を建てることをギリシア人に許可し、それに関する競技祭を設けた。」

4 『ローマ皇帝群像』「ハドリアヌスの生涯」第13章

「こののち、ハドリアヌスは海路アジアを通り、島々を経てアカイアに旅行し、ヘルクレスとフィロパップスを模範として、エレウシスの秘儀に与った。アテナイの人々に多くの寄贈を行ない、アゴノテテスとして座った。」(南川高志訳、京大学術出版会版を使用。用語など一部、報告者が改変)

主要参考文献 (邦語)

桑山由文「ローマ帝国東部の発展と王家の記憶 —フラウィウス朝から五賢帝期へ—」『西洋史研究』新輯 30 (2001年11月), 41-63頁。

桑山由文「元首政期ローマ帝国におけるギリシア世界の変容 —東部出身元老院議員の台頭とアテナイ—」
笠谷和比古編『公家と武家 IV 官僚制と封建制の比較文明史的考察』(思文閣出版, 2008年) 所収,
418-445頁。

桑山由文「パンヘレニオンとローマ帝国」『古代文化』62-1 (2010年6月), 82-89頁。

長谷川岳男「ギリシア「古典期」の創造 —ローマ帝政期におけるギリシア人の歴史認識—」『西洋史研究』
新輯 32 (2003年11月), 24-55頁。

南川高志「ローマ帝国とギリシア文化」藤縄謙三編『ギリシア文化の遺産』(南窓社, 1993年) 所収, 77-108
頁。